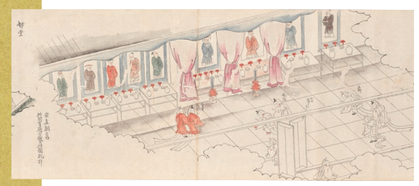
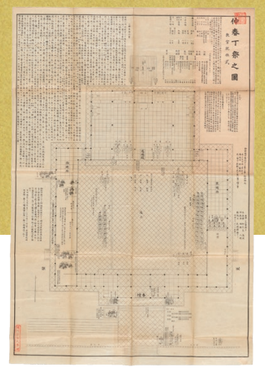
湯島聖堂と朝廷の釈奠

釈奠の儀式は、日本においては大宝元年（701）に行なわれたのを最初として、朝廷の官僚育成機関である大学寮と、国ごとの地方官人育成機関である国学において、2月と8月の年2回行なわれるようになりました。朝廷では15世紀以降衰退しますが、江戸時代初期に林羅山が孔子廟を建て、それが湯島聖堂に引き継がれることで江戸幕府の文教政策の核として復興します。記録類から、大学寮では軸装の絵像のみを用いたこと、湯島聖堂では彫像と絵像を併用したこと、像や祭器の配置などを知ることができます。



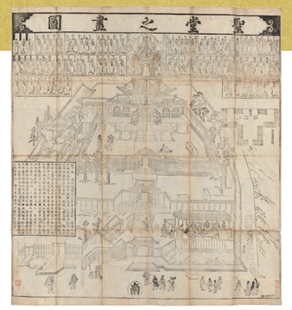
釈奠図
The Sekiten Ceremony
江戸時代・19世紀　1巻　P-1011

寛政十二年仲秋釈奠記
Record of the Sekiten Ceremony Held in the Autumn of 1800
江戸時代・寛政12年（1800）
1冊　QB-1000



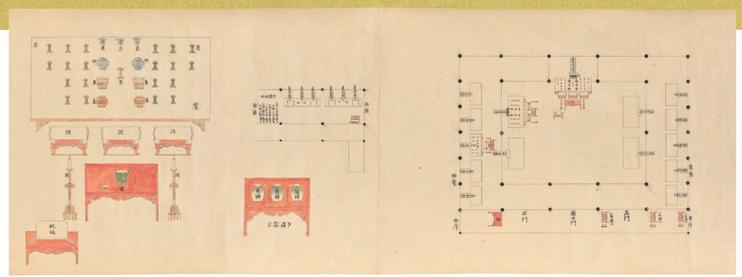
旧幕府聖堂釈奠図
The Shogunate's Sekiten Ceremony at the Yushima Temple
明治時代・19世紀
5枚　QB-10277

聖堂之画図
The Yushima Temple
菱川師宣筆
江戸時代・元禄4年（1691）
1鋪　P-3024



釈奠器とは

釈奠の際に用いられる祭器。江戸時代には俎に鮮魚を供え、簠、簋は穀物を、豆は肉類を盛って用いました。元禄4年（1691）、現在の湯島聖堂へと連なる孔子廟の正殿「大成殿」が落成し、湯島で最初の釈奠が行なわれました。この際に用いられる祭器は諸大名から献納されましたが、その大部分は火災により失われ、安永年間（1772～81）に再度大規模な献納が行なわれました。当館が所蔵する釈奠器の多くはこのときのものです。その形状や献納日などの詳細は『昌平誌』に図入りで記録されており、制作年代の判明する貴重な資料となっています。



湯島大成殿図
Plan of the Taiseiden Hall at the Yushima Temple
江戸時代・18～19世紀
1巻　P-2344

牡丹唐草金銀象嵌燭台
Candlesticks with Peonies and Vines
江戸時代・元禄2年（1689）
一対　前田綱紀献納
H-1345

昌平誌
Shōheishi (History of the Shōheizaka School)
犬塚印南編
江戸時代・文政1、2年（1818、19）
5冊　QA-397

海藻蒔絵俎、簠簋、豆
Table (*Zu*), Stemmed Dish (*Dou*), and Container (*Fu* and *Gui*) for Ritual Offerings, with Seaweed Patterns
俎：江戸時代・安永4年（1775）　1基　蜂須賀治昭献納　H-1360
簠簋：江戸時代・安永5年（1776）　6個のうち　伊達重村献納　H-1312
豆：江戸時代・安永5年（1776）　3個のうち　伊達重村献納　H-1304

謝辞：本特集は、筑波大学、および科学研究費補助金基盤研究（B）「「儒教美術史」構築のための発展的研究――東アジア文化圏の構造解釈と研究資源化」（19H01211）の協力を得ています。
画像提供：筑波大学附属図書館（「歴聖大儒像」のうち周子像・程伯子像・程叔子像・張子像・邵子像・朱子像）

表紙：**孔子像**（「歴聖大儒像」のうち）*

特集　儒教の美術――湯島聖堂由来の絵画・工芸を中心にして――　令和5年（2023）6月27日発行
執筆・展示企画：大橋美織、沖松健次郎、土屋貴裕、福島修、古川攝一　撮影：藤瀬雄輔、吉岡由哲ほか　翻訳：ミウォシュ・ヴォズニ（以上、東京国立博物館）
デザイン・制作・印刷：精興社　編集・発行：東京国立博物館
©2023東京国立博物館　Tokyo National Museum

特集 儒教の美術

湯島聖堂由来の絵画・工芸を中心にして

Thematic Exhibition
The Arts of Confucianism and the Yushima Temple

令和5年（2023）6月27日（火）～8月6日（日）
東京国立博物館　本館 3-1・2室、特別1室

湯島聖堂は儒教の祖・孔子（前552/551～前479）を祀る建物を中心にした建造物群の総称で、江戸時代の前期に第5代将軍徳川綱吉（1646～1709）によって建てられました。明治時代には、東京国立博物館と筑波大学の前身機関の発祥の地ともなりました。その縁から、当館と筑波大学には、湯島聖堂由来の、孔子およびその門弟たちを祀る儀式である釈奠のための道具類を中心とした儒教にかかわる美術作品・資料が伝来します。

そのなかでも、孔子をはじめとする21人の儒教の聖人を描いた「歴聖大儒像」は、京都の狩野派を代表する狩野山雪（1590～1651）の基準作であり出世作として注目の作品です。明治時代以来、15幅が当館に、6幅が筑波大学に分蔵されてきました。また、蒔絵作品を中心とした釈奠に用いる器物（釈奠器）は制作年代が明らかで、近世漆芸史を考えるうえでの貴重な作品群です。

今回、筑波大学のご協力により、「歴聖大儒像」を明治に分かれて以来初めて21幅すべて揃った姿で展示します。さらに、釈奠器をはじめ、中世の孔子像、儒教の聖人像の姿と関連が考えられる宮中で使用された賢聖障子屏風、湯島聖堂を描いた絵図や平安時代の宮中での釈奠の様子を描いた図などを総合的に紹介いたします。

Confucianism, a belief system founded by the philosopher Confucius in ancient China, has had a lasting influence in Japan. Even the Tokyo National Museum and the University of Tsukuba trace their origins to an important Confucian temple in Tokyo, the Yushima Seidō.

Because of their shared origins, these two institutions are home to the twenty-one paintings comprising the series *Great Confucian Masters and Sages*. These paintings, which are key works by the painter Kanō Sansetsu (1589–1651), are being displayed for first time since they were divided between the Museum and the University. The exhibition is also presenting a diverse collection of artworks and records related to Confucianism and the Yushima Temple, ranging from accounts of ceremonies to painted screens and ritual objects.

「歴聖大儒像」のすべて

「歴聖大儒像」は、孔子までの古代の聖人（先聖）11人、孔子の弟子4人（四配）、宋時代の儒者（宋儒）6人、合計21人を一幅ずつに描いた作品です。江戸幕府に仕えた儒学者を代表する林家の祖・林羅山（1583～1657）が、上野忍岡の私邸内に建てた孔子を祀る先聖殿の文庫に収めるために寛永9年（1632）に制作させました。初め松花堂昭乗（1582～1639）が制作依頼を受けましたが、昭乗の推薦で狩野山雪が描き、彼の出世作となりました。完成の4年後に、林羅山の求めで、朝鮮通信使副使の金世濂（1593～1646）が21幅すべての画面右上に賛文を記しています。先聖殿が綱吉によって湯島に移されるに伴って湯島聖堂に引き継がれ、明治時代に文部省所管の浅草文庫などを経て、当館（先聖と四配15幅）と高等師範学校（現 筑波大学、宋儒6幅）に分蔵されました。当初からか不明ですが、先聖11人と、四配と宋儒10人とで表装の色を変えています。

周公*　武王*　文王*　成湯*　大禹*　帝舜*　帝堯*　黄帝*　神農*　伏羲*

歴聖大儒像
Great Confucian Masters and Sages
狩野山雪筆、金世濂賛　江戸時代・寛永9年（1632）
* 東京国立博物館　（H-1342-1～15）　15幅
** 筑波大学附属図書館　6幅

狩野山雪とは

狩野山雪は、安土桃山時代から江戸時代初期にかけて活躍した、京狩野派を代表する画家です。多くの寺院の障壁画を手掛けただけでなく、400人以上の画家を収録した一大日本画家伝『本朝画史』の草稿を書くなど、学者肌の画家としても知られています。儒学者と交流し、中国の書物も多数収集しながら、理知的で細部にこだわりのある画面を作り上げました。中国の版本の図様をもとにした「歴聖大儒像」は、山雪の人物画の基準作であり代表作です。

朱子**　張子**　程伯子**　孟子*　曾子*　孔子*　顔子*　子思*　周子**　程叔子**　邵子**

君臣図像

帝舜

上巻に伏羲以下40人の君主、下巻に蒼頡以下68人の臣下を収録した歴史人物画集です。ここに描かれているのは半身像ですが、「歴聖大儒像」のうち、伏羲・帝舜・成湯・武王、周子・張子・邵子・程伯子・程叔子・朱子の典拠であると考えられます。

君臣図像　Illustrations of Rulers and Their Retainers
江戸時代・17～19世紀　2冊　帝漢（旧）-04
原書：高宗哲撰　明時代・16世紀

中世の孔子像

中世の孔子像には坐像と立像二つのタイプがあったことが現存作例からうかがえます。坐像は「孔子像」のように、脇息を前に正面を向いた姿です。類似する姿は平安時代後半の白描図像にも見られることから、古くからある姿と考えられます。また、小指と薬指を曲げ、人差し指と中指をそろえて伸ばす右手の形は、仏教の在家信者を代表する「維摩像」と共通します。一方の立像は「文宣王図」（文宣王は孔子に贈られた諡号）に見られる姿で、中国の官服を着た斜め向きの姿です。室町時代以降、孔子像は立像タイプが主流となりました。

重要文化財　孔子像
The Philosopher Confucius
鎌倉時代・13世紀　1幅　A-11967

文宣王図
The Philosopher Confucius
室町時代・15世紀　1幅　A-10180

維摩像
The Buddhist Layman Vimalakīrti
南北朝時代・14世紀　1幅　A-22

儒教とは

中国の孔子が大成した、徳や礼節に基づいて社会秩序を保とうとする思想・学問体系です。徳によって政治を行なった古代の君子を理想とし、信仰的側面もそなえます。江戸幕府は統治の重要な指針として公式の学問としました。

賢聖障子と儒教図像

内裏のなかでも最も格式高く、多くの重要行事が執り行なわれたのが紫宸殿です。この殿舎の天皇の御座の背後に立てられていたのが賢聖障子で、中国の殷から唐に至る32人の賢臣が描かれています。平安時代以来描き継がれ、安土桃山時代以降7回行なわれた内裏造営にあたっては狩野孝信、探幽、常信ら狩野派の筆頭絵師が、8回目は住吉広行が担当し、この賢聖障子は今も京都御所に残されています。彼らは賢聖障子の図像を収集するとともに、副本の制作を依頼されることもありました。賢聖障子に描かれた中国古代の賢臣像は、江戸時代に儒教が盛行して先哲の姿が求められた際、その図像源として参照されたと考えられます。

賢聖障子　Wise Retainers　住吉広行筆　江戸時代・18世紀　8曲1隻　A-1013-1

賢聖障子（模本）
Wise Retainers (Copy)
江戸時代・18～19世紀
8曲1隻　A-3039-1
原本：伝狩野探幽筆
江戸時代・17世紀